

コールバーグにおける教育目的と 道徳的判断に関する考察

折 口 量 祐

1. 研究の背景と本稿の目的

本稿では、アメリカの心理学者 L. コールバーグ (Lawrence Kohlberg, 1927-1987) の教育理論に着目し、(1) コールバーグは教育の目的をどのように規定するのか、(2) 道徳的判断力が高まるとはどのようなことか、ということを明らかにする。

(1) については、コールバーグが批判的とした、アメリカの伝統的道徳教育との関係の中で論じる。また、(2) については、「分化」(differentiation) と「統合」(integration) という鍵概念を中心に論じる。

コールバーグの道徳性発達理論は、道徳教育の理論と実践に多大な影響を及ぼしてきた。彼の理論は、「価値明確化」(values clarification) や「キャラクター・エデュケーション」(character education) と並び、アメリカ道徳教育の三大潮流として位置づけられ⁽¹⁾、アメリカ内外の道徳教育の発展に寄与してきた。わが国においても、例えば加賀裕郎「発達理論の教育学的基礎」において批判的に検討されるなど、コールバーグの理論は道徳授業の一方法論に留まらず、哲学的・倫理的関心を集めているといえよう。

道徳教育の実践としては、コールバーグ考案の「ジレンマ・ディスカッション」(dilemma discussion) が兵庫教育大の荒木紀幸を中心とする研究グループにより「モラルジレンマ授業」として展開されている。また近年では、コールバーグが1972年以降に取り組んだ教育実践「ジャスト・コミュニティアプローチ」(just community approach) に関する研究が、一部の研究者によって進められている。

コールバーグの論文をまとめた *Essays on Moral Development* は、全三巻⁽²⁾からなる彼の全集ともいえる著書であるが、そのうち一部の論文が邦訳され出版されている。また、訳本の他にもいくつかの研究論文や研究書が発表されている。たとえば佐野安仁・吉田謙二編『コールバーグ理論の基底』は、コールバーグの諸論文を検討し、彼の理論の基礎を明らかにしたものである。先行研究では、コールバーグにおける教育目的は、J. デューイ (John Dewey, 1859-1952) の教育哲学を基礎に置くものと説明される。しかし、日本国内での先行研究に限れば、道徳的な問題解決能力の発達に関して、コールバーグがデューイの何を受け継いだのかは明らかでない。コールバーグ理論は、現実の世界で起こる道徳的問題を解決する能力を育てるためのものである。そのためにも、デューイからどのような影

響を受けたのかを明確にすることは重要であるように思われる。

2. アメリカ道徳教育の伝統

2-1. 品性教育

アメリカ道徳教育の伝統は、「品性教育」と呼ばれる立場によって始まる。コールバーグによれば、この立場は「道徳性」を「徳目袋」(a bag of virtues)、すなわち「肯定的であると一般に考えられているような人格特性の集合」⁽³⁾によって定義する。つまり、道徳的であることは善や徳を有していることであるから、道徳教育の目的はそれらを内面化させることであるということになる。この「品性教育」は、1880年代から1930年代にかけてのアメリカの学校教育において展開されていた。当時のアメリカは、産業革命に伴う移民の増加や、その結果としての都市部における貧困差の拡大という混乱の時代にあった。アメリカが一つの国家として共通の価値体系を求め、教育にその使命を担わせたのである⁽⁴⁾。

「品性教育」は、たとえば愛国心、勤勉、節約、利他主義、そして勇気といった「徳目」(virtues)を、説話を通して子どもたちに教えようとするものであった。T. リコーナ (Thomas Lickona, 1943-)によれば、この立場では、たとえば『マガフィー読本』(McGuffey Reader)が教材として用いられた。1919年に聖書に次ぐ発行部数となったこの本は、英雄的精神や徳について書かれた説話集であり、その読み聞かせを通じて、価値の内面化を図るものであった⁽⁵⁾。

しかし、1960年代に入り、世界的な「個性主義」(personalism)の時代になると、個人の権利や自由の価値が称賛され、一方で義務や責任は軽んじられ、道徳は個人的なものとして捉えられるようになった⁽⁶⁾。さらに、スプートニク・ショック以降、アメリカの教育は技術者の育成に注力したため、「品性教育」は次第に衰退の途を辿ることとなったのである。そのような時代の流れの中で、道徳教育の主流になったのが「価値明確化」の立場である。

2-2. 価値明確化の教育

「徳目」の教え込みによる道徳教育は、望ましい価値の「注入」(indoctrination)を目的とするため、教師による一方的な価値の押しつけであるとされ、しばしば批判的となる。隈元 (2003)によれば、戦後アメリカの教育思想は、品性教育の問題を克服しようとして発展したのであり、特定の価値の教え込みを避けながら、どのようにして人間の成長を実現するかということが問題にされてきた⁽⁷⁾。

「価値明確化」の提唱者である教育学者ラス (Louis E. Rath)、ハーミン (Merrill Harmin)、サイモン (Sidney B. Simon) らは、当時のアメリカ社会の著しい変化や不安定さにより生じた、子どもの無気力や無関心を問題視した。彼らは1978年刊行の『価値と教授』(Values and Teaching)において、価値を「注入」するのではなく、子どもの主体的な価値の選択を促す教育理論を展開した。それゆえ、この立場では、価値そのものではなく、それを獲得する過程が重視されるのである。ラスらによれば、ある事柄が価値であるためには以下のような七つの必要条件があり、それら必要条件がひとまとまり

で「価値づけ」(valuing)の過程とされる⁽⁸⁾。

- ①自由に選択すること
- ②複数の選択肢の中から選択すること
- ③各々の選択肢の帰結についての十分な考慮の後で選択すること
- ④尊重し、大切にすること
- ⑤肯定すること
- ⑥選択に基づいて行為すること
- ⑦繰り返すこと

こうした「価値づけ」の過程を通して得られたものが価値と呼ばれるものである。上述の過程を通して、子どもが自分にとっての価値を明確にし、現実の生活の中で活用できるようになることを目指すのである。では、「価値明確化」と対比したとき、コールバーグ理論はどのようなものとしてあらわれるのだろうか。次節において検討する。

3. コールバーグ理論の構造

3-1-1. 価値明確化における教育の目的

「価値明確化」の教育は、子どもが自分にとっての価値が何かを明確にしていく過程に目を向ける。ラスらの定義によれば、価値とは経験の中から生まれる行動の「一般的指針」(general guides)であり、教育の目的は子どもの人生に方向性を与えるような価値を獲得させることであるとされる。この立場において価値は「個人的な事柄」⁽⁹⁾であり、教師が「正しいこと」について教えることはできないと考えられている。したがって、教師の役割は子どもの価値の獲得過程を支援することであるとされる。かつての品性教育において、価値は大人や社会の側にあった。道徳教育において重要なことは、未成熟な子どもが大人と同じように徳を身につけていくことだったのである。そのような立場とは異なり、「価値明確化」の視点は子ども中心である。価値を子どもの経験に対してアブリアリなものとして捉えず、子どもの思考に焦点化することで、道徳教育の充実を図ったのである。

コールバーグもまた、子どもの思考に着目しており、その点において「価値明確化」と立場を共にする。しかし、コールバーグにとって不満足であったのは、「価値明確化」の持つ相対主義的な性格である。たしかに、子ども一人一人が自分にとってのより善い生き方の指針を見つけ出せるようにすることは、道徳教育の重要な役割の一つであるといえよう。しかし、他者との利害や期待が対立する状況において、「何が正しいのか」(what is right)を考える判断力を養うこともまた、道徳教育が果たすべき重要な役割である。以下の引用は、道徳についての相対主義的な捉え方に対するコールバーグの批判が顕れている部分である。

どの文化にも独自の価値があるということは、おそらく科学的に真であろうが、この事実を「ある文化において善であることが他の文化においても善であるとはいえない」といった道徳理論の

言明へと移しかえることは、道徳的にみて問題がある。そうした言明は、人食いの風習のある社会においては、人を食べることが道徳的に正しいと主張するのと同じく、問題のあるものである⁽¹⁰⁾。

「人食い」は他者の基本的人権を著しく損なうものであり、正当化し得るものではない。たしかに、ある文化や社会において正しいと認められているようなことが、他の文化や社会においてもそうであるとは限らないだろう。しかし、だからといって、「何が正しいのか」についての真の判断を放棄することにはならない。コールバーグは、文化や社会の垣根を超えた普遍的道徳の在り方の探究を進めたのである。そこで彼は道徳性に発達論理を適用し、どのような文化においても、個人の道徳性は一定の方向へと発達すると考えた。その発達の筋道こそ、三水準六段階から構成される、道徳性発達のモデルである。

3-1-2. コールバーグにおける教育の目的

「価値明確化」の教育の目的は、子どもが自分自身の価値を獲得できるようにすることであった。それでは、コールバーグは教育の目的をどのように規定したのであろうか。西村（2010）や西田（2014）によると、コールバーグは「成長」（growth）そのものを教育の目的としたデューイの哲学にならい、「発達」（development）そのものを教育目的としている⁽¹¹⁾⁽¹²⁾。たしかに、コールバーグの論文「教育の目的としての発達」（Development as the Aim of Education）を確認すると、「発達」という機能的要因を教育の目的としたことが、デューイから引き出されたものであると述べられている。

現実の世界で生じている社会的な問題を解決するためには、状況をよく観察し、どのように行動すればよいのかを熟考する必要がある。状況の観察と行動の計画を何度も何度も繰り返すことによって、行動の確実性は高まっていく。このことは、デューイによる実験的知性を用いた問題解決の理論であるが、この理論から、コールバーグを再解釈してみよう。すると、コールバーグにおける「道徳的判断」（moral judgment）は、道徳的な問題状況において「何が正しいのか」を、実験的知性を用いて吟味することであり、「発達」は、実験的知性を用いて不断に更新されるものであるということになる。

ところで、先行研究においては、たとえば加賀（1993）が両者の理論の一致に関して批判の立場を取る。その批判は、コールバーグの理論枠組みがデューイよりもピアジェ的構造主義に大きく依拠していることに由来している⁽¹³⁾。だが、コールバーグの関心が、現実の問題解決に向けられていたことを示すためには、両者の理論の一致に関するさらなる検討が必要であると思われる。

3-2. 道徳的判断の適切さと発達の関係

ここまででは、コールバーグの規定する教育の目的について論じてきた。以降では、「道徳的判断」

の能力が高まるとはどのようなことを明らかにする。

コールバーグにおける「道徳」の意味は、以下に示す引用にあらわれている。

私の見解では、「道徳」という言葉が基本的に示しているのは判断の形式とか、意思決定の過程の形式であって、行動や、感情や、社会制度の形式ではない。（中略）私の「優越性の主張」は、第六段階の義務や権利（すなわち正義）の判断が、他の段階の判断よりも優れているという主張である⁽¹⁴⁾。

つまり、道徳は「判断の形式」や「意志決定の過程の形式」にあらわれるものであり、コールバーグは「判断」の実質的内容ではなく、それがどのような過程を通して形成されたのかに着目するのである。

それでは、より高い段階における「判断」がより適切であるというのは、どのような意味であろうか。コールバーグはその適切さの基準を、「分化」と「統合」であるとする。隈元（1993）は「分化」を「認知的データ（認知的刺激や知識等を含む言葉の最も広い意味でのデータ）を特定し弁別する機能一般」⁽¹⁵⁾、「統合」を「認知的データを包括してまとめるところの機能一般」⁽¹⁶⁾と説明する。また、コールバーグは以下のように述べる。

分化と統合は、発達理論においては、今問題となっている構造のより良い均衡をもたらすものと考えられている。より分化し統合された道徳的構造は、より多くの道徳問題、葛藤、見解を、より安定した方法であるいは自らの内でより一貫した方法で扱うことができる⁽¹⁷⁾。

つまり、「分化」と「統合」がより進んだ段階においては、より一貫し矛盾のないような判断が可能になるというのである。そうすると問題は、両者の増大が道徳性の発達にどのように関係するのかということである。コールバーグは認知的発達を道徳性の発達の問題に適用できるのは、「分化」と「統合」が、それぞれ「規範性」(prescriptivity)と「普遍性」(universality)に対応するためであるとする。以下において、これらの論理的な対応関係を明らかにする。

3-2-1. 「分化」と「規範性」

上述の通り、コールバーグは「分化」が増大することを、「道徳的判断」における「規範性」の増大に対応させて論じている。「規範性」とは、ある「道徳的判断」がそのもたらす行為に対してもつ拘束力のことである。つまり「規範性」のより高い段階において、「道徳的判断」は実際の行為をより強く導くのである。

また、コールバーグは「分化」の増大を、『である』と『べきである』の間の分化の一連の増大⁽¹⁸⁾や「道徳的な価値や判断を、他の価値や判断から徐々に分化していくこと」⁽¹⁹⁾と表現している。この

ことの意味を、三水準六段階の発達図式に従ってみてみよう。

第一段階の人は正しい行為を行う理由を、罰を避けることができるからであるとする。また、第二段階の人は、自分自身の利害や欲求を満たすことができるからだとする。つまり、前慣習的水準にいる人たちにとっては、行為のもたらす直接の結果と、その行為をすべきであることの理由とが「分化」されず、混同されているのである。子どもが発達の慣習的水準へと進むと、行為の結果という事実と、何をすべきなのかという当為との「分化」が可能になる。

第三段階において、人は他者から認められるような行為こそ正しいと考えるようになる。さらに第四段階になると、「一般的な他者」の視点も考慮に入れることができるようになり、社会的な秩序や法を維持するように努める。このような慣習的水準は、集団や社会を維持する視点に立っており、規則を規則としてそれ自体尊重することができるようになるのである。つまり、行為の正当性の根拠を直接の結果ではなく、規則のもつ「規範性」に求めるのである。

しかし、コールバーグにとっては、この水準も未だ「分化」が完全に遂行された状態とはいえない。第四段階において、なすべきことは規則や法の命じるところのものであり、その意味で、事実と当為を混同しているからである。発達の脱慣習的水準になると、社会的規則や法が国や文化によって異なっているということに気づく。高橋（2002）によれば、この水準では、「具体的な社会的規範の背後にあって、それらを原理的に基礎づけている基本的カテゴリー（たとえば、公正・平等・個人の尊厳など）が認知され、そうしたカテゴリーが直接、行為を方向づける原則となる」⁽²⁰⁾。つまり、何が正しいのかということの根拠を、より普遍的な道徳原理に求めるのである。「道徳的判断」の「規範性」は、この水準においてもっとも大きくなる。つまり、「分化」が増大すること（事実と当為が区別されていくこと）によって、「道徳的判断」は行為に対する「規範性」を増大させるのである。

3-2-2. 「統合」と「普遍性」

「道徳的判断」の適切さのふたつめの基準が「統合」であり、これは「普遍性」と対応している。このことに関してコールバーグの以下の記述を引用し示す。

統合に対応するものは普遍性という道徳的基準（*moral criterion*）であるが、カント以降の形式主義者が強調してきたように、それは、一貫性という基準に密接に関連している。普遍的原理に基づいた道徳性では、原理があらゆる状況におけるあらゆる人々の権利を規定することを要求する。それと対照的に、慣習的水準の道徳性では、共和党员のためではなく民主党員のための善い行動を規定したり、ベトナム人ではなくアメリカ人としての善い行動を規定したり、息子としてではなく父としての善い行動を規定する⁽²¹⁾。

「普遍性」とは、ある「道徳的判断」が、その問題状況に関わる人すべてにとって妥当と認められることを可能にするものである。このような「普遍性」の増大により、その「道徳的判断」がより多く

の人に受け入れられることが可能になる。道徳性発達段階のより高次の段階では、より低次の段階の判断を踏まえた上で、よりいっそう合理的な解決を導くことができるようになる。

より高次の段階における「道徳的判断」がいっそう合理的であるのは、より多くの異なる他者のパースペクティブを判断の理由として包括しまとめている、すなわち「統合」しているためである。つまり、「道徳的判断」がより適切であるためには、その葛藤状況に関わるさまざまな他者の立場に自分の身をおいて考えることが必要である。この他者の立場に身をおくことを「役割取得」(role-taking)といい、この「役割取得」能力の増大は道徳的発達にとって必要不可欠なものとコールバーグは考えている。

3-2-3. 役割取得

コールバーグは「役割取得」を「自己と似た誰かとしての他者に対して反応する傾向や、他者の役割にたって自分自身の行動に反応する傾向」⁽²²⁾と定義している。

道徳的発達が、基本的に役割取得の様式の再構造化のプロセスであるのなら、道徳的発達を促す基本的な社会的入力「役割取得の機会」であるといえる。役割取得をするための第一の条件は、グループや制度への参加である⁽²³⁾。

つまり、道徳性の発達にとって「役割取得」は欠かせないものであり、「役割取得の機会」(role-taking opportunities)を保証すること、すなわちグループや制度への参加を重要なものとコールバーグは考えている。

コールバーグ理論における「役割取得」能力の発達は、道徳的判断力の発達における転換点である。ライマー、パオリット、ハーシュらの説明によれば、「子どもが他者の立場に立つことができ、初めて他者の主張がわかり、自分の主張と他者の主張を比べることができる」⁽²⁴⁾のであり、自己の視点と他者の視点の区別がつくことが道徳的発達にとって必要であるとしている。例えば、親への思いやりということを考えよう。3歳の子どもの母親が、仕事に疲れて帰ってくる。しかも少し頭痛がするので、息子に、今は遊んであげられないことを分かってもらおうとする。しかし、息子は納得できず、怒ってぐずる。親子は言い争い、母親は自分の子の思いやりのなさに悩む。この男の子は、母親が怒っているのはわかるが、母親の立場に立って、彼女の疲れや頭痛がどのようなものかについて、思いを巡らせることまではできない。しかし、これが10歳の子だと反応も違ってくるだろう。母親の立場に立って、仕事で疲れている上に頭痛がすることがどれほどつらいだろうかを想像することができる。したがって、自分と遊ぶことができないのは仕方がないと判断することができるのである。

おわりに

コールバーグにおいて教育の目的は、子どもの道徳的判断力を発達させることであった。「発達としての教育」という考え方は、デューイの哲学を基盤としている。デューイの「成長としての教育」とは、実験的知性による経験の不断の更新であるが、コールバーグのいう「道徳的判断」もまた、状況の観察と行動の計画を繰り返し行うことによって導かれるのである。コールバーグは、以上のように教育の目的を規定するということが明らかになった。

また、個人の道徳性の発達には一定の方向性があり、より高い段階においてより適切な判断を行うことができる。判断の適切さは規範性と普遍性にかかわるものである。規範性は判断が導く行為に対してもつ拘束力のことであり、普遍性は判断の妥当性を担保するものである。

本稿では、コールバーグの教育の目的を論じる際に、デューイから受けた影響について述べた。また、3節で述べた「役割取得」は、G.H. ミード（George Herbert Mead, 1863-1931）が用いた概念である。両者はプラグマティズムの思想家であり、コールバーグもその潮流に位置づけられると考えられるが、日本国内の先行研究ではコールバーグをプラグマティストと捉える見方は多くない。プラグマティストとしての側面を強調することは、コールバーグの実践的関心を明らかにする上で重要なものと思われる。このことは今後の課題とする。

注(1) 西村正登「アメリカ道徳教育三大潮流の比較研究」『東アジア研究』山口大学大学院東アジア研究科紀要、2010年、149-164頁。

(2) ただし第三巻は現在のところ未刊である。

(3) Lawrence Kohlberg, *Essays on Moral Development vol. 1: The Philosophy of Moral Development*, Harper & Row, Publishers, 1981, p. 9.

(4) 荒木寿友『学校における対話とコミュニティの形成—コールバーグのジャスト・コミュニティ実践』三省堂、2013年、26-27頁。

(5) トーマス・リコーナ著、三浦正訳、『リコーナ博士のこころの教育論—＜尊重＞と＜責任＞を育む学校教育の創造』慶応大学出版会、1997年、6-7頁。

(6) 同上書、9-10頁。

(7) 隈元泰弘「人間の成長と教育—道徳教育論の展開—」佐野安仁監修『現代教育学のフロンティア—新時代の創出をめざして—』世界思想社、2003年、42頁。

(8) ルイス・E・ラス、シドニー・B・サイモン、メルル・ハーミン著、遠藤昭彦監訳『道徳教育の革新—教師のための「価値の明確化」の理論と実践—』ぎょうせい、1991年、35-40頁。

(9) ルイス・E・ラス、シドニー・B・サイモン、メルル・ハーミン著、前掲書、51頁。

(10) L. コールバーグ、C. レバイン、A. ヒューアー著、片瀬一男、高橋征仁訳『道徳性の発達段階—コールバーグ理論をめぐる論争への回答』新曜社、1992年、109頁。

(11) 西村正登、前掲論文、前掲書、155頁。

(12) 西田忠男「子どもの遊びと道徳教育（1）」『島根大学教育臨床総合研究』2014年、91頁。

(13) 加賀裕郎「発達理論の教育学的基礎」佐野安仁、吉田謙二編『コールバーグ理論の基底』世界思想社、1993年、10頁。

(14) L. コールバーグ著、永野重史編『道徳性の発達と教育』新曜社、1985年、94-95頁。

- (15) 隈元泰弘「哲学と心理学との架橋」佐野安仁，吉田謙二編，前掲書，119 頁。
- (16) 同上。
- (17) L. コールバーグ著，永野重史編，前掲書，53 頁。
- (18) L. コールバーグ著，前掲書，52 頁。
- (19) 同上書，97 頁。
- (20) 高橋征仁「コールバーグにおける道徳的発達段階」片瀬一男他著『道徳意識の社会心理学』北樹出版，2002 年，18-19 頁。
- (21) L. コールバーグ著，前掲書，52 頁。
- (22) L. コールバーグ著，永野重史監訳『道徳性の形成』前掲書，75 頁。
- (23) 同上書，76 頁。
- (24) J. ライマー，D. P. パオリット，R. H. ハーシュ著，前掲書，47 頁。